

観音とアンコールのフロンティア

茨城キリスト教大学文学部
宮崎晶子

はじめに

東南アジア大陸部に栄えたアンコール（9–15世紀）は、ジャヤヴァルマン7世期（在位：1181–1218年）において最も広い範囲に影響を及ぼした。その広さを誇示するかのように、王都（現在のシェムリアップ市近郊）から遠く離れた大寺院でも同王の治世下で制作された観音像（図1）が確認されている〔宮崎 2014：地図2〕。本像は、王都のみならずブレア・カン（コンボン・トム州、コンボン・スヴァイ）やタ・プロム（コンダール州、トンレ・バティ）、タイ西部のムアン・シンや中部のラーチャブリー、ベトナムのビン・ディン省（ヴィジャヤ）にも分布している。『カーランダ・ヴューハ（Kāraṇḍavyūha）』¹⁾（以下KV）を典拠としており、その特徴的な図像から「毛孔に天人をあまた宿す」（KV第2部第2章）という観音の特質を表現したものと解釈されている。この図像をもつ観音像は現在までアンコール以外の地域では発見されておらず、アンコールでも観音像が多数制作されたジャヤヴァルマン7世期のパイヨン様式においてのみ作例がある。観音像の分布を見る限り、広大な版図を内外に誇示し、観音に中央と地方の紐帯という役目を担わせていたと考えられる〔宮崎 2008〕。

世界遺産として知られるアンコール王都の繁栄は、王都だけ見ても語ることはできない。東南アジア大陸部で栄えた各地域と結びつき、境域・フロンティアを開拓することによって王都は華やき、王権は維持される。このような視点からアンコールの社会を俯瞰すると、観音像が奉納された遠方の寺院は王権にとってどのような意味合いをもつものだったのだろうか。

既往の東南アジアの観音研究として、フィノー〔Finot 1925〕やチュティウォン〔Chutiwongs 2002〕などがあげられる。しかし、いずれも観音像の図像解釈などを中心に研究しており、どのような社会的背景のもと観音像の奉納に至ったかの検討が不十分である。加えて、両者とも王権との関係性の中で観音をとらえようとはしていないため、関連する碑文も網羅していない。

東南アジアは熱帯性の気候のため、写本をはじめ多くの文字史料を失っている。宗教の広がりや王朝全体の中での観音と王権との関わりをとらえるには、彫像だけではなく数少ない現地史料である碑文も同時に研究対象としなければならない。

本稿では、はじめにジャヤヴァルマン7世期以前にアンコールにおいて観音がどのように認識されていたのか、観音が登場する代表的な碑文や彫像を確認し、大乘仏教がアンコールで主

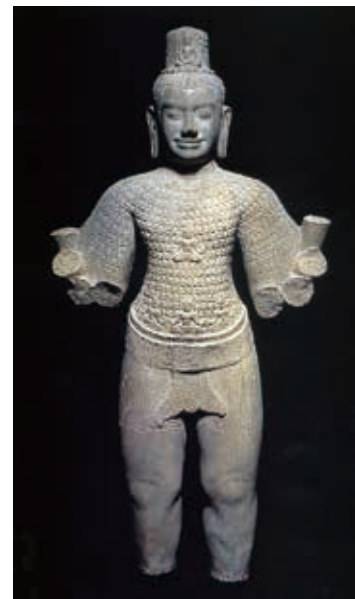


図1 「毛孔に天人をあまた宿す」
観音像 ギメ美術館所蔵
〔Jessup 1997：315〕

流になる以前の観音と王権との関わりを概観する。次に、ジャヤヴァルマン7世期の碑文や彫像から、観音が奉納されるに至った社会背景を考察し、「毛孔に天人をあまた宿す」観音像の奉納地であるベトナムのビン・ディン省（ヴィジャヤ）との関係を中心にアンコール最大版図における中央と地方、アンコールのフロンティアとの関係性を読み解いていく。

1. ジャヤヴァルマン7世期以前のアンコール碑文における観音

観音はアンコールの碑文の中で、「アヴァローキテーシュヴァラ (Avalokiteṣvara)」もしくは「ローケーシュヴァラ (Lokeṣvara)」という名で言及される。東南アジアでは観音はローケーシュヴァラと記されることが多いが²⁾、筆者が調べたところアンコールの碑文にはアヴァローキテーシュヴァラとローケーシュヴァラのどちらも確認でき、頻度としてはローケーシュヴァラの方がやや高いが、その使い分けや意味合いの違いまでは解明できなかった。よって、本稿ではアンコールの碑文に登場するアヴァローキテーシュヴァラ (Avalokiteśvara および Avalokiteṣa) とローケーシュヴァラ (Lokeśvara および Lokeṣa) の双方を区別なく扱う。また、後述する②プラサート・タカム (K.244) の碑文にもあるように、すでにプレ・アンコール期からアヴァローキテーシュヴァラやローケーシュヴァラには「異名」があったと考えられるが、アンコールの神格名の詳細な異同に関しては碑文研究の進展を待ちたい。

プレ・アンコール期の碑文にはわずかではあるが、観音の名が記されている。以下2点取り上げる。

①プラサート・アンピル・ロルム碑文 (K.163、7-8世紀、KH、コンボン・トム州)：

9行の古クメール語からなる碑文で、北祠堂の開口部に刻まれている [Cœdès 1937-1966 vol. 6:100-101]。冒頭には、ボン・プラジュニャーチャンドラにより「仏陀、マイトレーヤ、アヴァローキテーシュヴァラ」に対してクニユムと呼ばれる奉仕者が与えられた、と記されている (第1行から第3行)。

(1) *kñuṃ aṃṇoy poñ prajñācandra ai ta vraḥ kaṃmrātāñ añ* (2) *ṣāstā vraḥ kaṃmrātāñ añ maitreya vraḥ kaṃmrātāñ añ* (3) *ṣrī avalokiteṣvara vā jleñ 1 vā daiva 1 vā bhavitavya 1 vā priya 1.....*

②プラサート・タ・カム碑文 (K.244、791年、SK、シムリアップ州)：

祠堂の開口部に記された2行からなる碑文で、ローケーシュヴァラは「打ち勝つ (jayati)」尊格であり「ジャガッディーシュヴァラ」³⁾ という異名を持つと記されている [前掲書 vol. 3:89]。

(1) *samaṅgaṣaṣinagaṣake*
prathito yas supratīṣhito bhagavān
(2) *jaḡadiṣvara iti nāmnā*
sa jayati lokeṣvarapratimaḥ

次にアンコール期に入るが、ジャヤヴァルマン7世期以前で観音が記されている碑文は10世紀

半ばから11世紀初頭のものほとんどである。この時代はアンコールにおいて変革の時代といわれ、とくにラージェンドラヴァルマン2世（在位：944-968）、ジャヤヴァルマン5世（在位：968-1000年）、そしてスーリヤヴァルマン1世（在位：1002-50年）の3名に関しては、ヴィッカーリー [Vickery 1985] やメスティエ [Mestier 1970] が碑文考察から社会変化を指摘しており、アンコール史上重要なターニングポイントと成り得ることが知られている [宮崎 2014]。

以下10点の碑文を取り上げる。

③バエン・ヴィエン碑文（K.872、10世紀半ばごろ、SK・KH、シムリアップ州）：

南祠堂の開口部に記された碑文 [Cœdès 前掲書 vol. 5 : 97-104]。仏陀、ローケーシュヴァラ、プラジュニャパーラミターへの賛辞から始まり、ラージェンドラヴァルマンがチャム族やモン族に勝利したことを『ラーマーヤナ』になぞらえながらたたえ、ヤショーダラタターカの東メボン建立や供物に関して記録している。第3偈ではローケーシュヴァラを「四臂である」と記し、イーシュヴァラやヴィシュヌに例えている。

I	vītarāgam ahaṃ vande saṃsārasāravairāgyaṅ	yo nvarthām abhidhān dadhat cakāra jñānasampadā
II	bhāti vuddhāṅgahemādrau māramātsaryyatamasāṃ	cīvarāruṇamaṇḍalam saṃhṛtāv iva bhāskarahaṅ
III	caturbhujadharam vande darçayantaṃ svaviṣṇutvaṅ	lokeçvaram iveçvaram caturyyugadhare kalau
IV	prajñāpāramitā bhāti mūlaprakṛtitulyābhā	jinasantānakāriṇī trilokabhavasambhavā

④バッチュム碑文（K.266、953/960年、SK・KH、シムリアップ州）：

3棟あるうちの南祠堂開口部に記された左右24偈の碑文 [Cœdès 1908 : 213-252]。冒頭から仏陀、ローケーシュヴァラ、ヴァジュラパーニ、ラクシュミーに対する讃辞を記し、世界の幸福を成立させる「打ち勝つ」尊格として「四臂」のローケーシュヴァラをたたえている。

II	lokeçvaro jayati lokahitārtharūḍhas sandaçayann iva catuṣṭayam āryyasatyam dharmmasthitim sthirapadābhyadhikān dadhāno dhatte caturbhuvibhām bhuvanarddhaye yaḅ
----	--

⑤ワット・クデイ・チャール碑文（K.157、953年、SK・KH、コンボン・トム州）：

石板状の碑文で表面と裏面にあたるA・B面がサンスクリット語で記され、側面のc・d面は古クメール語で記される [Cœdès 1937-1966 vol. 6 : 123-127]。ハルシャヴァルマン2世（在位：942-944）への讃辞から始まり、王の師であるヴィレーンドラヴィキヤータへの同地（未開の土地）の下賜が記され、ヴィレーンドラヴィキヤータによるローケーシャの奉納が綴られている。

(A面、第3偈－第7偈、SK)。続いて、ラージェーンドラヴァルマンによる青銅製のローケーシュヴァラ像の下賜（B面、第13偈、SK）、アヴァローキテーシュヴァラの奉納（B面、第14偈、SK）が記されている。第14偈のみ韻律が変化しており、強調する意図があったと考えられる。

VIIbhāti lok.....mā	p(ra)nidhaye ca laukikam
	lokānugraham ālokya	lokeṣarūpam ād.....
XIII	devyāḥ lokeṣvarasyārccāṃ	ṣuddhāṃ kaṁsamayīm imām
	yasmai bhūmipater bhaktyā	sabhū(ṣ)āṃ bhūpatir dadau
XIV	so sthāpayad vipuladhīr avalokiteṣaṃ	
	rūpadvayaṃ suvidhinā saha devīrūpaṃ	
	prāsādaharmmyanivahe svahr̥dīva divye	
	vauddho gradhīṣ ṣaraṅgāṣṭabhir atra bhaktyā	

⑥ワット・シトール碑文（K.111、10世紀後半、SK、コンダール州）：

石柱状の碑文で、A-D面各25偈からなる〔前掲書 vol. 6 : 195-211〕。ジャヤヴァルマン5世への讃辞から始まり、高僧キールティパンディタの仏教改革への讃辞を述べ、彼が成し遂げた業績を列挙している。B面・第44偈から第46偈まではプラジュニャーパーラミターを奉納する様子や、キールティパンディタがヴァジュリンやローケーシャなどの像を新しく奉納する様子が記されている。

XLIV	tatsthāne sthāpitā sthityai	sarvvavidvaṅcaḥsvataḥ
	prajñāpāramitā tāri	jananī yena tāyinām
XLV	ṣṛīsatyavarmmaṇā bajri-	lokeṣārccā daṣādhikāḥ
	sthāpitāḥ prāg girau bhagnā-	sanā yo tiṣṭhipat punaḥ
XLVI	tuṅgādrau svapure khyāte	kumārambhapure pi yaḥ
	amarendrapurādyeṣu	lokeṣādīm atiṣṭhipat

⑦チクレン碑文（K.417、970年、SK、シムリアップ州）：

ブロック状で9偈からなる碑文〔前掲書 vol. 2 : 48-50〕。セデスは、1行目を「ローケーシュヴァラの足の塵が地獄の火を消す」と訳している。同地では地獄の火に「打ち勝つ（jayati）」者としてローケーシュヴァラをとらえていたといえる。第2偈以降、将軍サングラマーの娘ウマーとその兄により、観音（第4偈：Lokeṣa、第8偈：Avalokita）に供物が捧げられる様子が記されている。

I	lokeṣvaro jayati yasya varāṅghridhūlir
	āvīcikan dhagadhag ity ativṛddhavahnim
	nīricakāra narakavyasanāpahāre
	tasmin madīyanatir astu sahasravāram

⑧チクレン碑文 (K.168、972年、KH、シエムリアップ州) :

祠堂開口部に記された16行の古クメール語からなる碑文 [前掲書 vol. 6 : 168-169]。1 行目から 4 行目にかけてエーカーダシャムカ (Ekādaçamukha) やバガヴァティー (Bhagavatī) と並びローケーシュヴァラに対してさまざまな供物を奉納する様子が綴られている。

(1) 894çaka saptamī roc māgha nu khloñ valla va – (2) ta khloñ jnval rpes jvan jamnvan ta vraḥ kaṃmrateñ añ (3) ekādaçamukha nu vraḥ kaṃmrateñ añ lokeçvara nu (4) vraḥ kaṃmrateñ añ bhagavatī tai kañcī tai kaṃvī

⑨バンテアイ・ネアン碑文 (K.214、981年、SK・KH、バンテアイ・ミアンチェイ州) :

石板状の碑文 [前掲書 vol. 2 : 202-206]。第 2 偈を見ると、「ローケーシュヴァラの頭に阿弥陀仏を置く」との記述が認められる。また、ローケーシュヴァラとともにブラジュニャパーラミターに対しても同様に崇拜している様子がうかがえる。碑文後半には、ローケーシュヴァラや仏母 (ブラジュニャパーラミターと考えられる) を奉納したと記されている。

本碑文を再読した松浦は、第 5 偈に登場するジャガッディーシュヴァラは「ブレ・アンコール期のブラサート・タ・カム碑文 (前述の② K.244参照) でもローケーシュヴァラの名称として使われており、ここでもローケーシュヴァラの異名として問題なかろう。……だとすれば、ジャガッディーシュヴァラに最初に奉納を行った祖父はインドラヴァルマン 1 世 (在位 877–889) に仕えていたと言うから、少なくとも 9 世紀末からこの地には観音信仰が根付いていたことになる。」としている [松浦 forthcoming]。王都以外の地域において早い段階から仏教信仰が受容されていた様子がうかがえる。

siddhi svasti

- | | | |
|----|------------------------------|---------------------------|
| 1. | namo stu paramārthāya | vyomatulyāya yo dadhau |
| | dharmmasāmbhoginirmmāṇa- | kāyān trailokyamuktaye |
| 2. | bhāti lokeśvaro mūrdhnā | yo ‘mitābhañ jinan dadhau |
| | mitaraśmiprakāśānām | arkkendvor darśanād iva |
| 3. | praññāpāramitākhyāyai | bhagavatyai namo stu te |
| | yasyāṃ sametya sarvvajñās | sarvvajñatvam upeyuṣaḥ |
| 4. | astī tribhūvanavajro | yogī vinayaviśrutah |
| | dakṣiṇīyo mahānāgo | nityadāno pi nirmmadah |
| 5. | yasya mātāmaho bhrtyaś | śrīnāmā śrīndravarmmanah |
| | tīrthīnāmnīm dadau dāsīm | śreyorthī jagadīśvare |
| 6. | priyāyai somavajrākhyas | syālo lokeśvaran dadau |
| | yasya saṃsthāpya pātre ‘smin | vahnivyomanavāñkīte |
| 7. | tena pūrvvapraṭiṣṭhāpya | gotrasya jagadīśvaram |
| | munīndrajananī bhūyah | sthāpitāgniviyadvilaiḥ |
| 8. | pūrvvat tatra deveṣu | kṛtvā gotrasya kalpanām |

- | | | |
|-----|---|--------------------------|
| | dāsīdāsahiraṇyādi | dravyaṃ so dād viśeṣataḥ |
| 9. | tebhyo laghutarās santi | pañcānantaryyakāriṇaḥ |
| | lobhāt prasahya lumpanti | ye ‘smākaṃ kalpanām iha |
| 10. | kṣetrādikiṅkarasunartakaturyyakānām | |
| | kedāraratnakanakābharaṇādiddattaṃ | |
| | ye yajvanātmadhanamātravinaśaluvdhāḥ | |
| | lumpanti ye nirayam ugrabhayaṃ prayānti | |

[松浦 2008 : 144-145]

⑩トマ・プー碑文 (K.225、989年、SK、バンテアイ・ミアンチェイ州) :

石板状の碑文 [Cœdès 1937-1966 vol. 3 : 66-69]。仏陀、プラジュニャーパーラミター、ローケーシュヴァラ、ヴァジュリン、マイトレーヤ、インドラへの祈りから始まる。ジャヤヴァルマン5世への讃辞に続き、王に使える有識者のパドマヴァイローチャナが、仏母（プラジュニャーパーラミター）、インドラ、マイトレーヤ、仏陀、ローケーシュヴァラ、ヴァジュリンの像を建立したということが記されている（第11偈）。

I	yo py eko vahudhā bhinno	v(i)neyācānurodhataḥ
	çaṭva naikanirastha-	vimvo vuddhas sa pātu vaḥ
II	praññāpāramitā pāyād	apāyād vo varīyasah
	jinānām apy ajātānām	yā jātā janantī satī
III	vande lokeçvaraṃ bhaktyā-	mitābha iva bha.....
	yasyottuṅga.....
XI	vuddhamātrindramaitreya-	vuddhalokeçabajriṇām
	pratimā sthāpitās tena	candracandragrahāṅkite

⑪トゥオル・プラサート碑文 (K.158、1003年、SK・KH、プレア・ヴィヒア州) :

石板状の碑文 [前掲書 vol. 2 : 97-114]。ジャヤヴィーラヴァルマンへの讃辞が記されている B 面（該当部分は SK）には、サハデーヴァが同王により下賜された5つの土地を、リングプレーシュヴァラ、ブツダ、ローケーシュヴァラの像へ捧げる様子が記されている。

XXXIV kṣetrāni cārvār-prabhṛtīni pañca
 punyāçrayāl liṅgapureçvarāya
 vuddhe prabheçe ca tadiyarūpe
 lokeçvare so dita supraçaste

⑫プラサート・バエン碑文 (K.230、SK・KH、1026年、バタンバン州) :

石板状の碑文 [前掲書 vol. 6 : 241-246]。A 面はトライローキヤナータ（ローケーシュヴァラ）、

ヴァジュラパーニへの賛辞で始まり、スーリヤヴァルマン1世をたたえる。C面の14-18行目にはマドゥラパンティタという高官が「トライローキヤナータという名のローケーシュヴァラ像を奉納した」と刻まれている。20行目にはこのような奉納は「王のダルマ (rājadharma)」として行われたとされている。

(14) mratāñ cṛīmadhurapaṇḍita nu kvan (15) ^anak khloñ ta roḥ neḥh saṃ sit (16) arccā lokeçvara
jmaḥ kamrate (17) ñ añ cṛītrailokyanātha hāt mvā (18) y āmmvāy.....nu çaka ta ca (19) tvāritriṇinaba
sthā(panā) thvāy jābra (20) ḥ rājadharma sre anle prāṃ khñuṃ tap mvāy

以上12点の碑文をまとめると、①・②のプレ・アンコール期の碑文には、王への讃辞は認められず、仏陀やマイトレーヤと同様にアヴァローキテーシュヴァラが信仰されている様子、加えてすでにローケーシュヴァラの異名が記されている。アンコール期の碑文、⑤ワット・クデイ・チャール (K.157)、⑥ワット・シトール (K.111)、⑩トマ・プー (K.225)、⑫プラサート・バエン (K.230) は王への讃辞に続き、高官や高僧などによる彫像の奉納が記されている。高官や高僧の功績をたたえる中で観音像の奉納に言及しているが、観音だけではなく仏陀や般若波羅多を含め仏教全体への崇拜の念がうかがえる。

④バッチュム (K.266) では、観音は世界の幸福を成立させる、「打ち勝つ」尊格とされ、⑦チクレン (K.417) では「地獄の火に打ち勝ち」、⑨バンテアイ・ネアン (K.214) において「髻に阿弥陀仏を頂く」とされている。いずれも観音の代表的な特質である。「打ち勝つ」という尊格は、すでにプレ・アンコールの②プラサート・タ・カム (K.244) に認められ、後述するジャヤヴァルマン7世期には観音について言及する個所で「打ち勝つ (jayati)」と記す碑文が複数発見されている。

③バエン・ヴィエン (K.872) や④バッチュム (K.266) の「四臂である」という記述や、⑨バンテアイ・ネアン (K.214) の「髻に阿弥陀を頂く」などの記述は観音の身体的特徴に言及しており、クメールの彫像に影響を与えたと考えられる。

碑文の分布はシエムリアップ州を中心に点在し、王都以外からの発見が多い。このことは、⑤ワット・クデイ・チャール (K.157) や⑪トゥオル・プラサート (K.158) に見られるように、王が仏教を信仰する高位聖職者や有力者に対し地方の土地を付与し、未開の地の開拓 (⑤ワット・クデイ・チャール、K.157) を進めていったことが関係していると考えられる。10世紀半ば-11世紀初頭におけるこのような動きは、地方への支配拡大という王の意図と、仏教の拡大という高位聖職者や地方有力者の意図が一致した結果であろう。

アンコールの社会変革期であるラージェーンドラヴァルマン2世からスーリヤヴァルマン1世に現れた観音に関する碑文を見る限り、一連の変革の帰結は⑫プラサートバエン (K.230) の碑文に表されている。本碑文では、観音の奉納という行為はスーリヤヴァルマンによる「王のダルマ」とされている。それ以前の碑文は、王への賛辞を記しながらも高官や高僧による観音像の奉納であることに違いはなかった。このことは、松浦も記しているように「観音像の造立に際して王権の関与が以前よりも深まったことを示唆している」といえよう [松浦 forthcoming]。

以上検討したように、碑文によるとプレ・アンコール、アンコール期の初期において仏教の尊

格各々の特質や身体観を認識していた様子がかがえ、観音は高官や地方の有力者により信仰されていた。王と観音との関係性は希薄ではあるが、スーリヤヴァルマン1世の時代になると、仏教の拡大は次第に王の業績に組み込まれていったと考えられる。

2. ジャヤヴァルマン7世期以前の観音像

プレ・アンコール期およびアンコール期初期において制作された観音像は多くはないが、本節ですべてを取り上げることはできないため、代表的なもの3点を見ていく。

①観音像（タ・ケオ州、アンコール・ボレイ、7世紀、鉛と錫の合金、プノンペン国立博物館、Ga. 5330）（図2）：

一面二臂で左手には未敷蓮華を持ち、円筒形の宝冠の正面に化仏が表現されている。短い裙を身につけ、右ひざを軽く曲げトリバングの姿勢をとっている。円筒形の宝冠は7世紀のチャム美術の影響が指摘されている [Jessup 1997:156]。

②観音像（バタンバン州、プノン・タ・クリアム、8世紀、ブロンズ、プノンペン国立博物館、Ga. 3548）（図3）：

一面二臂で髻に化仏が表現されている。長い裙を身につけ、楕円形の頭光は頭部につながっている。髻や着衣、持物の形状などからシュリーヴィジャヤの影響が指摘されている [前掲書:157]。

③観音像（ベトナム、タン・ロン（伝）、7世紀中ごろ—8世紀初頭、砂岩、ギメ美術館、5063）（図4）：

一面二臂で両手を垂下し未敷蓮華や宝珠を持つ。手からは彫像を支える支柱が伸びており、プレ・アンコール期の特徴が確認できる。頭部の装飾、偏袒右肩、化仏の様子はスリランカの伝統を継承している [東京国立博物館他編 1997:53]。1988年にギメ美術館に寄贈されるまで個人蔵であり、ベトナムで発見されたと伝えられている。

プレ・アンコール期の細かな様式分類はいまだ確立されていないため、一言でプレ・アンコール期の彫像といっても3点とも異なる特徴を示している。いずれも一面二臂ではあるが、チャンパーやシュリーヴィジャヤ、スリランカの影響が指摘されており、この3体に共通する様式は見受けられない。分布を見る限り、プレ・アンコール期の観音を一つのまとまりとして論じることは困難といえる。様式の不一致および分布が点在していることを考慮すると、同時代において観音は王権との関係性が脆弱であったばかりでなく、その信仰は一部の人々の内にとどまっており、領域を巻き込んだ全体的な動きには組み込まれていなかったといえる。

次にアンコール期に入ると、10世紀ごろから再び仏教の尊像や観音像が散見されるようになる。左右第一手が世願印を示す観音像（二臂や八臂）が数点発見されており（図5）、観音の示す印や、観音が表現された石碑裏面にKVの真言である「六字真言」が刻まれていることなどから、同経典第1部第3章「指から水を流す観音」を出典とする観音だと考えられている [Woodward

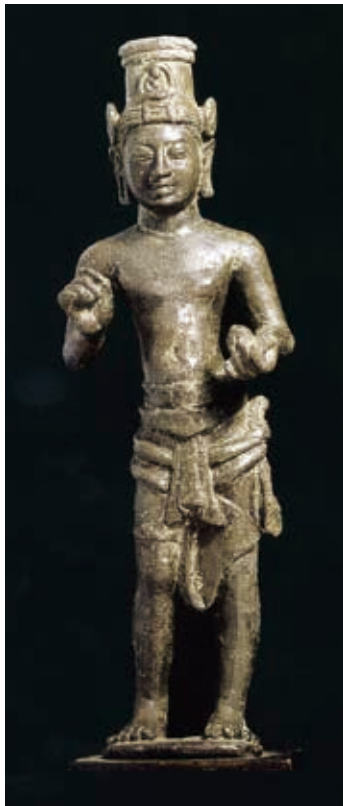


図2 観音像
プノンベン国立博物館所蔵
[Jessup 1997 : 156]

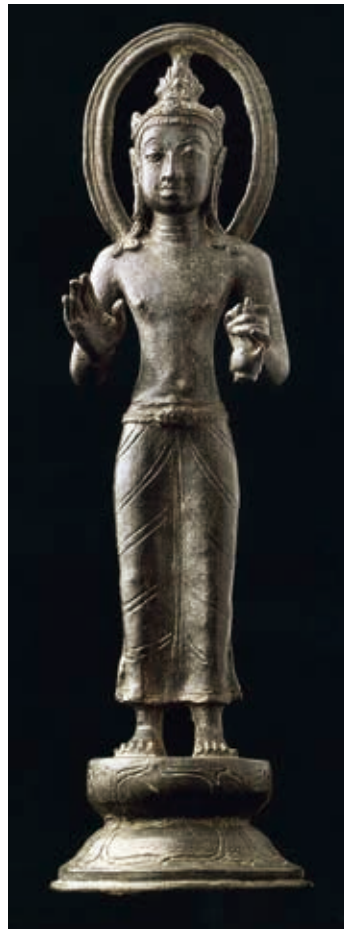


図3 観音像
プノンベン国立博物館所蔵
[Jessup 1997 : 157]



図4 観音像
ギメ美術館所蔵
[Jessup 1997 : 153]

2007]。これらの彫像の詳細に関しては拙稿 [Miyazaki 2010] を参照されたいが、彫像の分布はシムリアップ北西地域にとどまっている。様式も10世紀前半から11世紀初頭のクレアン様式までとみられ、前節で述べたアンコールの変革期に制作されている。左右第一手が与願印を示す観音像は、同時代に制作された仏教の奉献塔（図6）にも登場し、4面のうち1面に刻まれている。ほかの面には、ナーガ上の仏陀座像や般若波羅蜜多像、喜金剛像（ヘーヴァジュラ）などが認められる。管見の限り、左右第一手で与願印を示す観音像が刻まれた奉献塔および石碑はプノン・スロックから2点発見されている。

これらの状況がプレ・アンコール期と大きく異なる点は、同じ経典の同じ個所を典拠とすると考えられる観音像が複数制作されているという点である。印や像容など図像的特徴も一致し、年代や様式も近いことを考えると、同一文化圏内での制作であると考えられる。

そのほか、コンボン・チャム州のプノン・トロップからはシヴァ神像のように見える一面四臂の観音像（クレアン様式）（図7）や、仏陀や金剛手菩薩とともに三尊像として祀られた一面二臂の観音像（バンテアイ・スレイ様式）（図8）が発見されている。制作時期はどちらもアンコールの変革期にあたり、⑥ワット・シトール（K.111）からも近いことから、キールティパンディタと関係するような仏教集団による制作の可能性が考えられる。



図5 「指から水を流す」観音像
ウォルターズ美術館所蔵
[Woodward 2007 : 72]



図6 奉献塔 アンコールミュージアム所蔵
©EFEO (Photo No.16078)



図7 観音像 ギメ美術館所蔵
[Baptiste and Zéphir 2008 : 189]

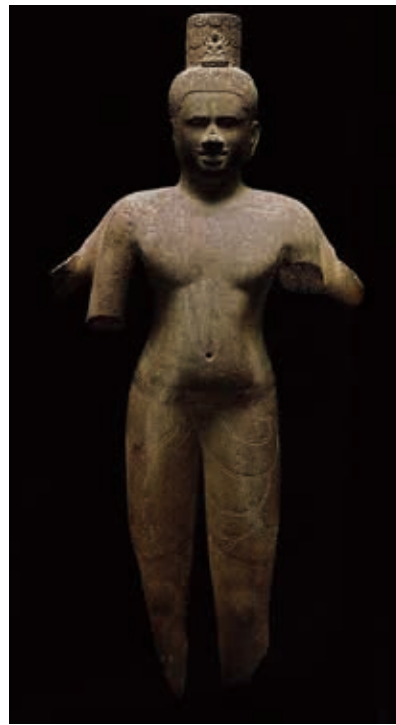


図8 観音像 ギメ美術館所蔵
[Baptiste and Zéphir 2008 : 168]

この時代の観音像の分布を見る限り、プノン・スロックを中心としたシェムリアップ北西の一地域、もしくはコンボン・チャム州周辺に集中している。両地域は離れており、観音像の像容も一致しないため同じ集団によるものとは考えられない。よって10-11世紀には、地方において仏教布教の核となるような地域が出現したものの、プレ・アンコール期同様、領域全体を巻き込んだ全体的な動きには至っていないといえる。

3. ジャヤヴァルマン7世期における観音の碑文と彫像

これまで、10-11世紀初頭にかけての観音に関する碑文および彫像を概観した。次にアンコールにおいて観音が出現するのはジャヤヴァルマン7世期であり、10-11世紀初頭のものとは比べると、その分布は突如拡大したかのようである。[宮崎 2014: 地図2] アンコールにおいて最も多くの観音像が制作されたのはこの時代であり、東南アジアの観音信仰は絶頂期を迎えた。しかし、同王の治世が終わりを告げると、観音は急速に求心力を失う。「あらゆる方向に顔をむけたほとけ」(『法華経普門品』)、「遍在するほとけ (viśvarūpi)」(KV 第2部第2章) [Studholme 2002: 138] である観音は、東南アジア社会から姿を消し、大陸部は現在まで続く上座仏教社会へと移行していく。

同時代の碑文を見る限り、観音像の出土数に反してアヴァローキテーシュヴァラおよびローケーシュヴァラに関する碑文は多くはない。このことは前述の碑文にもみられたように「ジャガッディーシュヴァラ」(② K.244) や「トライローキヤナータ」(⑫ K.230) といった観音の「異名」が定着した結果と推測することができる⁴⁾。スーリヤヴァルマン1世が「王のダルマ」として行った観音像の奉納以後、おそらくはアンコール域内において観音の土着化が加速していったと考えられるが、観音の異名や土着化の過程に関しては他稿に譲りたい。

本節ではジャヤヴァルマン7世期に刻まれた2点の碑文を取り上げる。

⑬ プレア・カン碑文 (K.908、1191/1192年、SK、シエムリアップ) :

石柱状の碑文 [Coëdès 1941]。A面第4偈にはローケーシュヴァラをたたえ「打ち勝つ (jayati)」尊格であると記している。この冒頭部分に関しては、同様のものがタ・プロム (K.273、1178年、SK、シエムリアップ州) (第1偈から第18偈が同一)、プラサート・チュルン (K.287、K.288、K.547、12世紀末-13世紀前半、SK、シエムリアップ州) (第1偈から第14偈が同一) に記されており、マックスウェルによればバンテアイ・チュマー (K.1206、12世紀、SK、バンテアイ・ミアンチェイ州) にも同様のもの (第1偈から第9偈が同一) が確認されている [Maxwell 2009: 143]。第34偈には「父の姿をしたジャヤヴァルメーシュヴァラという名のローケーシャ」が確立されたとあり、続く第35偈には「そのアヴァローキテーシュヴァラの周りには283体の神々を据えた」と刻まれている。34偈と35偈では韻律を変化させている。B面第44偈および第51偈にはローケーシュヴァラに供された品々が記されている。

IV trailokyakāṅkṣitaphalapasavaikayonir
agrāṅgulīvitapabhūṣitavāhuṣākhaḥ
hemopavītalatikāparivītakāyo
lokeṣvaro jayati jaṅgamapārijātaḥ
XXXIV sa ṣṛījayavarmmanṛpaṣ
ṣṛījayavarmmeṣvarākhyalokeṣam
vedenducandrārūpair
udamīlayad atra piṭṁmūrttim
XXXV āryāvalokiteṣasya madhyamasya samantataḥ

	çatadvayan trayoçtis	tena devāḥ pratiṣṭhitāḥ
XLIV	lokeçvarādevānā	pūjāṅgāni dine dine
	droṇāeddhān tandulāḥ pākyāḥ	khārikāḥ pañcasaptatiḥ
LI	lokeçādyaṅhrivinyāsa-	maçakārthaprasāritāḥ
	ṣaḍuttarā ca pañcāçac	cīnāmçukamayāḥ patāḥ

⑭ピミアナカス碑文 (K.485、12世紀、SK、シエムリアップ州) :

石柱状の碑文 [Coedès 1937-1966 vol. 2 : 161-181]。A面冒頭にはニアック・ポアンに関する碑文が記されている。ニアック・ポアンは、KV第2部第1章「シンハラ冒険譚」という説話をもとに作られたと考えられている⁵⁾。この説話は、商人シンハラが500人の仲間とともに船出し難破した結果、鬼女の島に漂着し、観音の化身である神馬バーラーハに助けを求めようというものである。本碑文には、途中判読できない箇所も存在するが、ローケーシュヴァラにより世界が保たれ、“vālāhaka⁶⁾”というアシユヴァ(馬)が皆を連れて海を渡る様子が記されている。

(5) lokeçvaro lokahitānulomo

lokān sva — — — — r dadhad yaḥ

(6) vālāhakāçvo vdhigatāvahaç ca

nānāpa — — sutarā(m vi) bhāti

以上2点の碑文以外にも、プレア・カンにはローケーシュヴァラという名が記された短い碑文が多数ある。カムラテン・ジャガットという冠称ののちに“çrīraṇadivyalokeçvara”、“çrīparamadivyalokeçvara”、“çrīsarvvalokeçvara”など“名称+lokeçvara”という表記が見受けられる。プレア・カンの尊像配置に関する研究によれば、それらは王の高官をモデルとした尊像を指していたと考えられる [久保 2014 : 64]。また、同寺院は「中央と周縁」の関係をもつ尊像が入れ子状に重なり、仏教やヒンドゥー教の神々が一堂に会する形式になっていることがわかっており、ジャヤヴァルマン7世期における一大宗教センターを目指したと指摘されている [前掲書 : 75]。

プレア・カン、タ・プロム、プラサート・チュルン、バンテアイ・チュマーの碑文は冒頭部分の文言が同一で、これらの寺院の建立は王権がかかわる一連の事業であったといえる。プラサート・チュルンはアンコール・トムを囲む周壁の四隅に建てられた寺院で、碑文は王都を囲む配置になっている⁷⁾。バンテアイ・チュマーはシエムリアップから北西に100kmほど離れたところにある巨大寺院(東西約800m、南北約600m)で、KVを出典とする観音や千手観音など8体のレリーフがあることで知られている。マックスウェルによれば、先述した碑文(K.1206)は8体の観音が描かれた周壁の北東の角に記されており、北西の角にも未完ではあるが第1行目途中まで同一の碑文が確認されている。バンテアイ・チュマーの周壁の四隅にも、プラサート・チュルンのように同じ文言の碑文を記す予定があったと考えられる [Maxwell 前掲書]。王都シエムリアップや地方の大寺院バンテアイ・チュマーを訪れるだろう内外からの訪問者に対して、同王が

「打ち勝つ」尊格である観音を国家の中心に据えていることを知らしめることができたといえる。

次に、⑭ピミアナカス碑文 (K.485) に記された「シンハラ冒険譚」は、交易を重視する時代や地域で盛んに取り入れられた説話として知られている。KV が流行したネパールなどでは、16世紀になると単独の説話「シンハラサールターバーフ・アヴァダーナ」として、ネパールーチベットを歩き来する商人たちによって語られる [Lewis 1993]。本稿 3 節で詳しく述べるが、ジャヤヴァルマン 7 世期は交易が国の繁栄に大きくかかわる時代であった。王都を訪れた人々に「航海神」としての観音を広める意味合いがあったと考えられるが、交易と観音信仰に関しては別稿で論じたい [宮崎 forthcoming]。



図9 四臂の観音像 プノンベン国立博物館所蔵 [石澤良昭監修 2005: 32]

彫像に目を向けると、同時代の観音像は四臂や八臂で髻に化仏を頂くだけの特徴がないものが多い (図9)。四臂の観音に関しては、③バエン・ヴィエン (K.872) や④バッチュム (K.266) におけるローケーシュヴァラの身体に関する認識が定着した結果とみられるが、その

ような特徴だけでは経典の特定には至らないため、図像比較以上の研究をすることが難しい。

経典が特定されている観音像として、筆者が研究している KV を出典とする「毛孔に天人をあまた宿す」観音像が挙げられ (図1)、バンテアイ・チュマーのレリーフに表現されている観音像も同経典の他の個所 (第1部第4章「ヒンドゥーの諸神を出現する身体」、第2部第7章「マヘーシュヴァラへの授記」) を典拠としている [Boisselier 1964]。

ジャヤヴァルマン 7 世期の観音像の特徴は、KV という同一経典の複数の個所を典拠とするとともに、10世紀-11世紀初頭にみられるような観音含め仏陀・般若波羅蜜多等など仏教全体への配慮というよりも、「毛孔に天人をあまた宿す」観音像やニアック・ポアンの「シンハラ冒険譚」のように、あくまでも観音を前面に打ち出し展開しているという点である。加えて、その奉納は以前の時代と比べると領域的な分布を示し、プレ・アンコール期およびアンコール期前半の10世-11世紀初頭には見られない、王朝全体、時には域内をはるかに超えるような分布を見せている。

では、ジャヤヴァルマン 7 世期に制作された「毛孔に天人をあまた宿す」観音像は、たんに領域を知らしめるだけの存在として遠方の寺院に奉納されたのだろうか。次にジャヤヴァルマン 7 世を最大版図へと導いたであろう、アンコールにとってのフロンティアの一つであるヴィジャヤに着目し、どのような社会背景のもと観音像の奉納に至ったのか検討する。

4. ジャヤヴァルマン 7 世期におけるアンコールのフロンティア

前述した観音像は、近年ではバンテアイ・クデイ寺院 (シエムリアップ) からも発見されているが、全体で19体ほどしか見つかっておらず、出土および発見地がわかるものも半分程度しかな

い。にもかかわらず、西はタイとミャンマーの国境近くにあるプラサート・ムアン・シン、南はタ・プロム（コンダール州、トンレ・バティ）、東はベトナムのビン・ディン省（ヴィジャヤ）（図10）など遠方の大寺院から発見されている。本節では、アンコールのフロンティアであるチャンパーのヴィジャヤとの関係について言及したい。

チャンパー碑文とクメール碑文を研究したシュワイエによれば、11世紀半ば以降チャンパーとアンコールとの好戦的な関係は強まり、そのことはたびたび双方の碑文に登場する [Schweyer 2007]。アンコールはスーリヤヴァルマン2世期になると、インドラプラから遷都したヴィジャヤ攻略に向けて動き出す。ジャヤヴァルマン7世期には1190-1220年までの間、チャンパーをアンコールの支配下に置いており、これによりアンコールとの度重なる衝突に一旦終止符が打たれた [Schweyer 2007 : 67-70]。両国の戦いは⑭ピミアナカス (K.485) やプラサート・チュルン (K.288) の碑文に記されている。チャンパー碑文もジャヤヴァルマン7世期のアンコールとの抗争に関して言及しており、チャンパー領域の北部にあるミーソン (C. 86. 1)、中央部にあるポーナガル (C. 30 B4)、南部にあるスヴァヤムトパンナ (C. 4) にも記されていることから、チャンパーにとって非常に衝撃的な出来事であり [Lepoutre 2013 : 238]、領域全体に影響を与えるものであったといえる。では、これらの碑文に記された度重なる戦いは両国にとってどのような意味をもっていたのか考察したい。

チャンパーはアンコールのように大量の農作物を生産する広大な平野を有しない王国である。そのため、東南アジアを代表する港市国家として繁栄をした。従来の研究ではチャンパーは主に中継交易により富を得ていたが、中国が東南アジアやインドと直接取引をするようになり南海において支配的勢力となった12世紀以降、チャンパーを中継地として利用する必要性がなくなり、同国は弱体化し衰退の道をたどったとされてきた [和田 1971 : 446-447]。北部ベトナムの大越に

押し込まれ徐々に南下し、988年ごろにはチャンパーの都は中部にあるインドラプラから南部にある

ヴィジャヤ（現ビン・ディン省、新州）に移った。「毛孔に天人をあまた宿す」観音像が発見された地である。しかし、近年の研究では新都ヴィジャヤ成立の背景には、交易において自国産物である沈香などの国際商品をもたらす中部高原・メコン水系の後背地があったとも考えられている [桃木 2011 : 171]。南シナ海交易の変化および自国産物の重要性から、高級沈香の産地である中部高原へのアプローチを考えると、クアンナム（インドラプラ）よりビン・ディン以南のヴィジャヤが有利といえる [桃木 2001 : 34-35]。つまり、中継交易の衰退および中心地の南下をもってチャンパーの交易全体が衰退したとは必ずしもいえない。自国産物の重要性に関しては、10-13世紀のチャンパーによる中国への朝貢活動からも裏付けがなされている [重松 2004]。



図10 「毛孔に天人をあまた宿す」観音像
ハノイ国立博物館所蔵
[Boisselier 1963 : fig. 223]

11世紀以降、チャンパーはカンボジアや北部のベトナムに進出を試みる。チャンパーの朝貢を研究した重松

は、このような行動は「沈香の産出または搬出ルートの確保を目指す意図も含まれた」としている。反対にカンボジア側から見れば上質の沈香を産出するチャンパーを攻略することを意味する。『嶺外代答』を研究した深見によれば、占城および真臘は広域流通センターとして機能していたと考えられる〔深見 1997：19-20〕。豊富な農作物を産する「富貴真臘」であっても、東南アジア大陸部において経済的優位性を保つためのチャンパー攻略は、産物と流通をめぐる当然の戦略であったといえる。

以上のことから碑文に記された両国の度重なる戦いは、チャンパーが都をヴィジャヤに南下させた988年以降、沈香を代表する自国産物の重要性が増し、アンコールがそれらの産出地を、チャンパーがそれらの産出地または搬出ルートを確認するための戦いであったと指摘できる。その結果、チャンパーとの戦いに勝利したジャヤヴァルマン7世はヴィジャヤにアンコール王都との紐帯となるだろう観音像を奉納し、領域を内外に誇示した。ヴィジャヤの観音像には、「打ち勝つ」という観音の尊格と、新たな経済拠点においてアンコールが勝利したことを重ね合わせた意味合いがあると考えられる。

おわりに

プレ・アンコール期および10-11世紀初頭、ジャヤヴァルマン7世期の観音に関する碑文と観音像の分布を比べた。その結果、プレ・アンコール期および10-11世紀初頭において観音信仰は小規模で王権との関係も希薄であったが、すでに観音は「打ち勝つ」尊格として認識されていた。また多くの碑文において、観音だけでなく仏陀や般若波羅多なども同様に言及され、仏教全体への配慮がうかがえた。仏教徒である高位聖職者や地方有力者などに未開の土地が下賜され、高官や高僧などにより観音像が奉納されたが、それらの行為は限定的だった。一方、ジャヤヴァルマン7世期になると王と観音の直接的な関係は強まり、王による一連の事業で建立されたと考えられるプレア・カンにおいて主尊として祀られる。同時に「打ち勝つ」尊格として複数の碑文に登場し、その特質は強調されていった。彫像に目を移すと「毛孔に天人をあまた宿す」観音像は地方の大寺院、とくに経済的拠点となりうる地域の寺院から確認される。分布状況を見る限り、政治的な戦略としての観音の奉納といえるが、このような王権と観音との関わりは、「王のダルマ」として観音の奉納を行ったスーリヤヴァルマン1世が端緒と考えられる。

アンコール期前半にみられる仏教徒への土地の下賜の結果、仏教は「点」から「面」への広がりを見せ、王権は宗教を用いて盤石な基盤を確立する。その関係性は、やがてジャヤヴァルマン7世期のアンコールを最大版図へと導いていった。新たなフロンティアを獲得し、巨大化し続けることで維持されてきた王朝は、ヴィジャヤ攻略ののち東南アジア大陸部において拡大の限界に達し、終焉を迎えた。

参考文献

- 石澤良昭監修 2005 『大アンコールワット展：壮麗なるクメール王朝の美：プノンベン国立博物館所蔵』東映
岩本裕 1978 『仏教説話の伝承と信仰』開明書院
小川博 1998 『中国人の南方見聞録—瀛涯勝覽』吉川弘文館

- 久保真紀子 2014 「アンコールのプレア・カーン寺院における尊像配置とその意味—出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して—」『佛教藝術』337:56-83
- 重松良昭 2004 「十～十三世紀のチャンパーにおける交易—中国への朝貢活動を通して見た—」『南方文化』:37-71
- 塚本啓祥他編 1989 『梵語仏典の研究』IV 密教經典篇 平樂寺書店
- 東京国立博物館他編 1997 『アンコールワットとクメール美術の1000年展』朝日新聞社
- 深見純生 1997 「流通と生産の中心としてのジャワ—『諸蕃志』の輸出入品にみる—」『東洋学報』:19-37
- 松浦史明訳・解題 2008年 「バンテアイ・ネアン碑文」(オーギュスト・パヴィー著、北川香子訳『カンボジアおよびシャム王国踏査行』(CSEAS Bibliographical Series No. 4)、京都大学東南アジア研究所):143-147
- 松浦史明 forthcoming 「刻文史料から見たアンコール朝の仏教とその展開」『アジア仏教美術論集』中央公論美術出版
- 宮崎晶子 2008 「アンコール期の地方遺跡における観世音菩薩像の役割—『カーランダビユーハ・ストラ』を出典とする彫像を中心に—」『東南アジア考古学』28:75-85
- 2014 「十～十一世紀における宗教と社会体制—アンコール王朝最大版図へのあゆみ—」『佛教藝術』337:85-99
- forthcoming 「アンコールの観音と南海交易」『東アジア文化講座 第1巻 東アジアの文学と異文化交流』文化通信
- 桃木至朗 2001 「唐宋変革とベトナム」『岩波講座 東南アジア史 2 東南アジア古代国家の成立と展開』:29-54
- 2011 『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会
- 和田久徳 1971 「東南アジアの社会と国家の変貌」『岩波講座 世界歴史13 内陸アジア世界の展開II 南アジア世界の展開』岩波書店:437-497
- Baptiste, Pierre and Zéphir, Thierry 2008 *L'Art khmer dans les collections du musée Guimet*, Reunion Des Musees Nationaux.
- Boisselier, Jean 1963, *La statuaire du Champa: recherches sur les cultes et l'iconographie*, École française d'Extrême-Orient.
- 1964 "Precisions sur quelques images Khmeres d'Avalokiteśvara les bas-reliefs de Banteay Chmar", *Arts Asiatiques*, 11: 73-90.
- Cœdès, George 1908 "Les Inscriptions de Bat Cum" *Journal Asiatique*, 10-12: 213-254.
- 1937-1966. *Inscriptions du Cambodge, vol. I-VIII*, École française d'Extrême-Orient.
- 1941 "La Stèle du Prah Khan d'Ankor", *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, 41: 255-301.
- 1947-1950 "Études Cambodhiennes XXXIX l'épigraphie des monuments de Jayavarman VII" *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* 44: 97-119.
- Finot, Louis, 1925 "Lokesvara en Indochine", *Études asiatiques / publiées à l'occasion du vingt-cinquième anniversaire de l'École Française d'Extrême-Orient par ses membres et ses collaborateurs*, G. van Oest: 227-256.
- Jessup, H. I. and Zephir, T., (ed.) 1997, *Sculpture of Angkor and Ancient Cambodia. Millennium of Glory National Gallery of Art*, Washington.
- Lepoutre, Amandine 2013 "Études du Corpus des Inscriptions du Campā" *Journal Asiatiques* 301(1): 205-278.
- Lewis, Todd T. "Newar-Tibetan trade and the Domestication of Siṃhalasārthabāhu Avadāna" *History of religions*. 33-2: 135-160.
- Matsuura, Fumiaki. forthcoming "Recent Developments in Khmer Epigraphy" Toyobunko.
- Maxwell, S. Thomas, 2007 "The Stele Inscription of Preah Khan, Angkor" *UDAYA* 8: 1-113.
- 2009 "A New Khmer and Sanskrit Inscription at Banteay Chmar" *UDAYA* 10: 135-201.
- Mestier du Bourg, Huber de 1970 "La premiere moitié du XI^e siecle au Combodge" *Journal Asiatique Tome CCLVIII*: 281-314.
- Mette, Adelheid, 1997, *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha*, Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.
- Miyazaki, Akiko, 2010 "The Roles of Bodhisattva Avalokiteśvara in Angkor: Focusing on descriptions in the

- Kāraṇḍavyūha-sūtra” *The Journal of Sophia Asian Studies*, 28 : 27-48.
- Chutiwongs, Nandana, 2002 *The iconography of Avalokiteśvara in mainland South East Asia*, Indira Gandhi National Centre for the Arts: Aryan Books International.
- Schweyer, Anne-Valérie 2007 “The confrontation of the Khmer and Chams in the Bayon period” 52-71.
- Vickery, Michael, 1985 “The Reign of Suryavarman I and Royal Factionalism at Angkor”, *Journal of Southeast Asian Studies*, XVI: 226-244.
- Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa. 1961 *Mahayana-sutra-samgraha*, Part I, Mithila Institute: 258-308.
- Woodward, Hiram. 1994/1995 “The Jayavuddhamahānātha Images”. *The Journal of Walters Art Gallery*, 52/53: 105-111.
- 2007 “The Kāraṇḍavyūha sūtra and Buddhist Art in 10th –century Cambodia” *Buddhist Art: Form and Meaning*, Pal, Pratapaditya (Ed.), Marg Publications: 71-83.

註

- 1) 本経典は7世紀に西北インドで成立した [Mette 1997]。観音 (Avalokiteśvara) の功德により人々が救済されるという内容の経典である。サンスクリット語のもので、散文で書かれた KVS と韻文で書かれた『グナ・カーランダヴューハ』がある [塚本他 1989 : 142-145]。散文のものには、12世紀 (1196年) のネパール写本 (Or. 3345) を使用したサマスラミ校訂本 [Vaidya 1961] とギルギット写本 (630年ごろ) を使用したメッテ校訂本 [Mette 1997] などがある。12世紀の完本 (Or. 3345) では全体は2部構成、第1部16章、第2部8章から成っている。また、天息災により982-1011年に漢訳 (『仏説大乘莊嚴宝王経』) されている。
- 2) 「ローケーシュヴァラ」に関して、岩本はネパールで一時期使用されていたもので、西暦759年の年次をもつネパールのジャヤデーヴァ王の碑文に記されている、としている [岩本 1978 : 218 注2]。また、後期のインドにおける観音はアヴァローキテーシュヴァラとは呼ばれず、シヴァ神の別名ローケーシャと同じ意味のローケーシュヴァラと呼ばれている、としている [岩本 1978 : 209-211]。
- 3) セデスの索引によれば、この異名は本碑文と後述する⑧バンテアイ・ネアン (K.214) の2点にのみ記されている。
- 4) ウッドワードは、プレア・カン碑文に記された Jayabuddhamahānātha は「毛孔に天人をあまた宿す」観音像 (Avalokiteśvara irradiant) である可能性があるとしている [Woodward 1994/1995]。Jayabuddhamahānātha の23の奉納地と出土地が一致している観音像は2体ある (ブラサート・ムアン・シンおよびラーチャブリー)。
- 5) 「シンハラ冒険譚」は『ジャータカ』や『今昔物語集』にも収められ、スリランカの建国神話とされている。ニアック・ポアンの「シンハラ冒険譚」に関しては、ピミアナカス碑文にローケーシュヴァラと記されていることから、KV の「シンハラ冒険譚」と考えられる。
- 6) vālāha は、valāha、vālāhaka、balāha、bālāha、bālāhaka と表記される。
- 7) 南東角に建てられた K.597は冒頭部分が欠損しており文言が確認できない。